青岸渡寺

青岸渡寺は仏教の天台宗のお寺です。青岸渡寺は那智山の一部で、33体の観音菩薩（慈悲の仏）像にお参りする西国三十三所巡礼の一番札所として特別な重要性を持っています。「西国」とは西の国々という意味で、この巡礼で参拝される寺社は全て、現在関西と呼ばれる地域とほぼ重なる圏内にあることを示しています。西国三十三所巡礼は、貴族や上皇の間でこの巡礼が人気を博した平安時代（794-1185）から行われてきました。

社寺複合施設

江戸時代（1603-1867）の終わりまで、青岸渡寺と熊野那智大社は那智山という一体の社寺複合施設を形成していました。この形態は、明治新政府が仏教と神道の厳格な分離を命じ、僧侶たちが那智山から追い出されたことで終わりを迎えました。1874年、僧侶たちは空になったお堂を青岸渡寺という新たな寺として使う許可を得ました。青岸渡寺とは、文字通り、青岸へ渡る寺という意味です。

1933年に建てられた山門は、仏教の守護神である仁王と神社を守る狛犬という珍しい組み合わせが特徴です。写真映えのする三重塔は1972年に建てられましたが、この塔は1581年に焼失した三重塔を再建したものとされています。

鰐口

青岸渡寺には、世界最大の鰐口もあります。鰐口はスリットゴングの一種で、その名前は文字通り「ワニの口」という意味です。青岸渡寺の鰐口は幅1.4メートル、重量450キロです。この鰐口はお寺の本堂の入り口に吊るされています。